

「ああ、いい天気だ。今日こそ、車をかんせいさせるぞ。」

ぼくは車を作るために、家のうらに向かいました。ぼくは、そこで車を作っています。もうすぐかんせい・・・のはずでした。

「わああ、ぼくの車がない。」

家のうらにまわってみると、車のざいりょうがありません。車のボディがあるだけです。

ぼくは、森にさがしに行くことにしました。

森に入るとすぐ、アマミノクロウサギがエンジンをもっていました。

「そのエンジンをかえして。」

ぼくが言うと、アマミノクロウサギは、

「このエンジンは、ぼくのドリルマシンだ。あなほりきょうそうで、ぼくにかったらかえすよ。」

と、じしんたっぷりに言いました。アマミノクロウサギは、あなをほって子どもをそだてます。あなほりは、とくい中のとくい。でも、ぼくだってあなほりにはじしんがあります。なぜかという、毎日はただであなをほって、やさいをうえているからです。

「ようい、どん。」

あなほりきょうそうがはじまりました。アマミノクロウサギは前足と口をつかって、きょうにあなをほっていきます。ぼくもまけないように、手をいっしょうけんめいうごかしました。ぼく30メートル、アマミノクロウサギ29メートル。ぼくがかちました。

「このエンジンは、きみにかえすよ。」

アマミノクロウサギは、エンジンをかえしてくれました。

森のおくにすすんでいくと、大きなハブがハンドルに体をまきつけていました。

「そのハンドルをかえして。」

ぼくが言うと、ハブは、

「このハンドルは、おれのすみかにぴったりだ。おれとしんちょうくらべをしてかったら、かえしてやるよ。」

と、するどいきばをひからせて言いました。ハブは、ぼくの足もとにピンとのびました。そして、

「ああ、おれのまけだ。このハンドルは、きみにかえすよ。」

と、あっさりハンドルをかえしてくれました。どうしてぼくのかちなのか、わかりません。下を見ると、なあんだ、ハブはぼくのかげとしんちょうくらべをしていたのでした。

森のおくへとすすんで行くと、アカショウビンが、いすの上で休んでいました。

「そのいすをかえして。」

ぼくが言うと、アカショウビンは、

「このいすは、ぼくのベッドにぴったりだ。ぼくと歌のしょうぶをしてかったら、かえしてあげるよ。」

と、歌いながら言いました。アカショウビンは、

「キュロロロロロロ・・・。」

となきました。ぼくは、

「朝日にはゆる当山の・・・。」

と、たつせ小学校の校歌を歌いました。

「ぼくのマケだ。そんなに元気な歌が歌えるなんてすごいなあ。いすはかえすよ。」

いすをかえしてもらって、ぼくは、さらに森のおくへとすすみました。すると、なんとケンムンがタイヤをもっていました。

「そのタイヤをかえして。」

とぼくが言うと、ケンムンは、

「このタイヤは、おれのブランコにぴったりだ。おらと木のぼりしょうぶをして、おまえがかったらこのタイヤをかえしてやるよ。」

と、ぼくのまわりをはしりながら言いました。

「ようい、どん。」

ぼくたちは、いっせいに木にのぼりはじめました。しばらくすると、下の方からケンムンの声が聞こえ

てきました。

「まいった、おらのまけだ。おまえのこしについているのは、タコじゃないのか。こわくてのぼれない。タイヤはかえす。」

こしを見ると、車のかぎにつけたタコのキーホルダーがゆれていました。

これで、車のざいりょうはぜんぶそろいました。

つぎの日、ぼくは車を作り、森のみんなをのせて、ドライブをしました。

「じめんの上をこんなにはやくはしれるなんて、すごいなあ。」

アカショウビンは、目を丸くして言いました。あまりのはやさにとばされそうになったので、ハブがシートベルトになってくれました。

「わあ、海ってこんなにきれいなんだね。」

はじめて海を見た、アマミノクロウサギは言いました。

「海には、さかながたくさんいるんだ。おれがつかまえてきてやるよ。」

ケンムンは、はりきって言いました。

たのしいドライブになりました。